熊野奥駈け　報告書

2003年 4月26日から30日

三輪主彦　〒1730023　東京都板橋区大山町

・@熊野奥駈け

代参人の試み・・・・修験者は代参人！

■スタスタ坊主

江戸の町にときおりあらわれ、上半身裸で頭に鉢巻きをし、錫杖をもってスタスタと歩き回る一団があった。彼らは、突然「代参、代参」と叫んで、駈け出すという人騒がせな連中で、スタスタ坊主と呼ばれたという話を、司馬遼太郎さんが「街道をゆく」に書いている。

驚いて人々が集まってくると、やおら代参をしてきたと言ってお札を取り出して、売り出した。それは霊験あらたかといわれた鞍馬山のお札だった。

もともとお札や陀羅尼助などの薬を売るのは山伏の仕事だったが、代参と称してスタスタ坊主たちもお札を売りだしたのだ。本当にお山で修行をしてきた修験者かどうか疑わしい部分もあるが、売り上げ向上には工夫が必要だったのだろう。

司馬さんは皮肉っぽく書いているが、私はそれを読んだときに、これはなかなかいけると思った。私は最近「代参人」を称しているのだが、「代わりにお参りしてきてくれ」という注文はほとんどない。そこで注文代参ではなく、先にお参りをしておいて、スタスタ坊主のお札のように、霊験あらたかな「報告書」をむりやり売りつけよう。

これはいけるのではないかと考え、実行し始めた。第一弾は熊野古道だったが、、たいていの人は「ありがとう」と言って、もらってしまう。私が大変な修行を積んでえた、霊験あらたかなお札、報告書なのだということをもっと強調すればよかったのだが、まだスタスタ坊主ほどの強引さと度胸がなかったので、うまくいかなかった。

いよいよスタスタ坊主をめざし、代参人になるべく、この報告書を作ることにした。

■役の行者（えんのぎょうじゃ）

この人をスタスタ坊主と一緒にしてはいけない。いまから1300年前、葛城山で修行を積み、山野を天狗のごとく走り回り、自然の力を会得し、修験道をおこした。最後には飛行さえできたというスーパースターで、多くの人の信仰を集めた。

役の行者は大峰山の金峰山（きんぷせん）で蔵王権現にあい、ここにお堂をたてた。役行者の修験道は各地に広まっていった。蔵王とか金峰というのは大峰山が本拠なのだ。

熊野奥駈けは役の行者が始めた修行場であった。私は地元の先達にお願いして０３年４月末日に４泊５日の日程で奥駈けに参加させてもらった。役の行者にはほど遠いがその一端に触れさせてもらった報告をしておきたい。

役の行者

古い南北線と新興の強大な東西線・・・・大峰山脈はエライ

■大きな地質構造は東西方向

紀伊半島には東西のラインが発達している。ラインは線のことだが、カタカナの方がなんとなく印象が強そうなので、最初だけそう書いてみた。

大きな地図をみると紀ノ川が吉野から五条、橋本をとおって和歌山市に流れ下っている。この川の流れはほぼ東西の線に沿っている。これは信州の諏訪湖に発し伊良子岬をとおり、四国吉野川に続いていく中央構造線によって決められているからだ。

構造線は断層によってつくられた地質の境目であり、強大な圧力の結果、岩石がグジュグジュに破壊されるので、浸食されやすくなり、そこに川ができる。日本列島という大きな目で見たときに、紀伊半島の南半分の地形はこの東西の線に沿う列に支配されているのだ。

「そんなバカな、山脈は全部南北に伸びているじゃないか、紀伊半島には南北線の方がよく発達しているんだ」 それも正しく、紀伊半島には、西から高野龍神、大峰、台高の三つの山脈が並行しており、それぞれの間を十津川と北山川が深い渓谷をつくり出し、南北に流れ熊野灘に注いでいる。

それじゃ、最初の言葉を訂正しなけりゃいけない。

■ローカルな地形は南北だ！

しかしここがおもしろい所で、北山川も十津川もいったいどっちに流れているのかわからないぐらい東西方向に蛇行を繰り返している。

表紙にある地図は、５万分の１の地形図をちょいと細工して作ってみたものである。ちょいとと書いたが、実は結構手が込んでいて、川や山並みはある程度正確に描いてある。これをみれば、私の言っていることはわかってもらえるかもしれない。

最初は南に流れだすのだが、すぐに東西線に引っ張られ、左右にふられる。やっと振り切って再び南に流れ出すとまた「よってらっしゃいよ」と袖を引かれて、東西にふらふら寄り道をしている。これらの川は河口までの直線距離は小さいが、流路はとてもながい。

山脈をよくみると、南北につながっているようだが、東西の横谷が数多く刻み込んでいるので、南北に縦走するにはとてつもない数の上り下りを繰り返さなければならない。

紀伊半島の地形をみると私は、「大きな東西の力のなかで、よくがんばって南北力を維持しいるなあ。山も川もエライ」と感じてしまう。「自然の造形に感情移入をするなよ」と言われるかもしれないが、紀伊半島というところは自然も霊気を持っているような気がする場所なのだ。

近畿地方全体をみても、金剛、葛城の山脈、山辺の道、京都東山など、南北の線がそこここそにある。古い時代には南北方向の線の方があったのだが、新興勢力だが圧倒的力をもった海洋プレートが押し寄せてきて東西勢力となり、紀伊半島を飲み込んでしまった。しかし、「すべてやられたわけではないぞ」と旧南北抵抗勢力はそこここで自己主張をしている。そんな構図をわたしは紀伊半島、とくに熊野地方に抱いていた。

熊野坐(います)神社・・・・熊野の神は自然神だった

■三本足のカラス

熊野という場所はなにやら得体の知れない所である。その中心になるのが熊野本宮大社。シンボルは三本足の八咫烏(やたがらす)である。太陽の中には３本足のカラスがいるという言い伝えがある。太陽を直接見ると目が焼けてしまうが、ススを付けて黒くしたガラスで覗くと黒い黒点が見える。その形がカラスに見えたのか、それはどうかわからないが、おもしろい想像力だ。

八咫烏は神武天皇が熊野から大和に進軍していったときの案内者とされている。それがなぜ日本サッカー協会のマークになっているのか？

■熊野の神々

本宮には十二の神が祀られているが、もともとは熊野坐（います）神社といった。その意味は、「熊野にいらっしゃる神様」である。あとあと祀られるナントカの神などではなく、名前はわからないがなんとなしにそこに神がいるというのは、自然そのものをあがめるという感じがして、わたしには大変嬉しい。

仏教が大きな影響をもちはじめると仏や菩薩が日本の神の姿で表れはじめる。それが本地垂迹説で、日本の「神さま」はみな「仏さま」が姿をかえて表れているだけだということになった。

熊野坐神社には、唐の天台山から仏さまが飛んできて、姿をあらわした。その神様を熊野権現という。熊野本宮の上四社、中四社、下四社にそれぞれ祀られて、熊野十二所権現として多くの人の信仰を集めるようになった。

熊野本宮大社の幟・・・三本足の烏

いままで、そんじょそこらの自然神だったのが、仏様の変わり身だというお墨付きが着いたのだ。さらに熊野は極楽浄土であるという信仰も生まれ、皇族の信仰も厚くなり、後白河上皇は３４回、鳥羽上皇は２１回も熊野御幸をした。ちなみに天皇が詣でるときには行幸という。熊野本宮の上四社の第三殿の証誠殿は一番格式が高く、詣でた人の極楽往生を証明してくださるのだ。何十回もの訪れた上皇様は一度の証明では物足りなかったのか、あるいは何か他にいいことがあったのか、都での仕事がいやだったのか。皇族だけでなく一般の庶民も極楽往生をめざす心には変わりなく、我も我もと「蟻の熊野詣」といわれるほどひしめき合って熊野に向かった。仏教では女性は大いに差別され、いったん男に変わらなければ極楽往生できないことになっていた。しかしここ熊野では男女や障害者の差別なくだれでも極楽浄土に行けるというので人気の的になった。

熊野は遠い・・・・それでも行くぞ！

■中辺路が一般ルート

熊野に詣でるにはふつうは紀伊路をとおった。京都からは淀川を船で下り、大阪の窪津王子を第一にして九十九王子を経る。口熊野といわれた田辺の出立王子で潮を浴び身を清めてから山中に入た。この路は中辺路（なかへじ）とよばれもっとも一般的だった。

熊野本宮に詣でたあと、船で熊野川を下り新宮にでる。ここには熊野速玉（はやたま）神社があり、さらに那智の滝で有名な那智大社に詣でる。この三社が熊野三山とよばれ、ワンセットになっている。

那智大社と青岸渡寺は神仏混淆のころには一体の寺社であったが、現在は別々になっている。ちなみに青岸渡寺は西国札所の第一番である。

那智大社からは大雲取り越え、小雲取り越えの難所をとって再び熊野本宮にもどり、中辺路を逆にたどってもどっていく。京都から往復すればほぼ一ヶ月を要する大旅行だった。

こんな所を皇族様たちは、お供を大勢従えて行ったのだ。地元は大いに賑わったことだろう。いまはＮＨＫさまが朝の連続ドラマ「ほんまもん」で、中辺路の伏拝王子を取り上げてくれたので多少にぎわいを取り戻したが、番組が終わればまたまた静かな山里にもどっている。

■熊野に詣でるルート

熊野詣でのルートは他にもいくつかあった。

熊野へ参るには
紀路と伊勢路のどれ近しどれ遠し
広大慈悲の道なれば
紀路も伊勢路も遠からず
（梁塵秘抄）

紀伊路の他に伊勢から来る伊勢路もあった。紀伊長島の荷坂峠や海山町の馬越峠などにはいまでもすばらしい石畳路が残っている。最近は三重県の熊野古道を歩く人も多い。

大辺路は海岸沿いを大きく回るルートで上り下りは少ないが、距離はながい。

小辺路というのは高野山からのコースで、果無（はてなし）山脈を越えてくる難路である。

さらにものすごい難路は、山伏の修行の路であった熊野奥駈けである。しかし熊野に詣でるのに、このルートを取る人はごく少数である。修行者でもほとんどが山上ヶ岳の行場で修行をするだけで、「奥駈け」の全コースを歩くことはまれである。

私たちは途中で「エエツ、熊野まで行くんですか？」と驚かれ、また尊敬（！）された。わたしの登山感覚でいえば、南アルプスの北岳から光岳まで全山縦走とおなじくらいのレベルのコースだろう。2000mに達しない山々ではあるが、山の深さ

は南アルプスに劣らない。
わたしはこれまでに田辺在住のＫさんを先達にして伊勢路や小辺路を歩かせてもらった。今回もＫさんのお誘いなので、すぐにはせ参じた。直前なって、走り仲間の下島伸介さんが一緒に行ってくれることになった。一行はＫ先達、東京組２名、奈良からのＭご夫妻、大阪の何でも食べるザンパンマの６人であった。いつもは一緒してくださった仲間の名前を書くのだが、今回は少々問題が複雑なので、下島さん以外は頭文字にさせていただいた。

女人禁制・・・・そりゃまずいよ！

■熊野奥駈け

熊野奥駈けは1300年前の「役の行者」の修行の路である。一説によれば全行程170㎞というが、実際には80㎞程度であろう。もともとは独立していた修験道は、後世になると聖護院を中心とする天台宗系の本山派と醍醐寺を中心とする真言宗系の当山派とに分けられる。奥駈けコースも、本山派は熊野本宮から北に上がる順峰（じゅんぶ）コース、当山派は北から南に向かう逆峰コースに分かれた。

我々は一般的な「柳の渡し」から熊野本宮に向かう逆峰コースをたどった。

いずれを通っても役の行者の修行道場であった大峰山山上ヶ岳を通過しなければならない。しかし山上ヶ岳は「女人禁制」なっている。山頂をふくむかなり広い範囲が対象地域で、縦走路には「女人結界」の石柱がたっており、厳しい見張りがなされている。全コースの縦走をめざす女性はいったん結界門から洞川（どろかわ）集落におりて、川を上って行者還岳近くで再び縦走路にもどる。この間はまる１日かかる迂回である。山上ケ岳から大普賢岳、国見岳の山々を通ることができないのだから、これまでに「奥駈け」を成し遂げた女性は一人もいないことになる。

1300年間の伝統というが、他の山々はとうに女人禁制を解き、だれでも自由に

女人結界石

登れるようになっている。ここ大峰山だけが全国で唯一、年間女人禁制になっている。国連の国際婦人年(1975年)のときにも解禁が叫ばれた。寺側も、もう解禁もやむをえないという姿勢になっていたのだが、全国各地の「講」の力が強く、まだまだ女人禁制は解けそうにもない。

■女は往生できない

女人禁制は仏教の教えにある「女人蔑視」に根拠にある。法華経の教典によれば、極楽浄土に往生できるのは男だけであり、女は、男に転生したときにのみ、それが可能となるという。女は不浄、性悪、淫乱だからというのだ。

女性は仏門に入っていくら修行をしても極楽浄土にはいけない。宗教だって時代にあわせて変化していかなければ。伝統を守るなんて言うけど、ただの頑固ジジイというだけではないか。もう目を覚まさなければいけない。太田大阪府知事が千秋楽に土俵に上がって賞を渡したいとしたが、日本相撲協会がこれを拒否をしたことも同根にある。昔からそうなっているんだからいいじゃないかと言う女性もいるが、田上太秀「仏教と性差別」（東京書籍1992）を読めば、女人禁制がいかに女性をバカにしたものかよくわかる。「まあ、いいじゃないか」とすますことではなく、激しく抗議すべき問題だ。

■実は1999年の夏

女性数人が、女人結界門をくぐって山上ヶ岳に登ってしまった。寺側はある程度了承していた節もあるが、10月になって朝日新聞が取り上げたことから、問題が大きくなり、寺の姿勢も強硬になった。女性には非難が浴びせられ、職場に多数の嫌がらせの手紙、電話が来たという。

われわれの先達であるKさんは、女人禁制に反対の立場をとり、毎年正式に女性の登山申請を申し入れては、断られている。それでもKさんは律儀に毎年結界門まで行き、抗議をしては下山している。奥駈けをしたくても、女性が同行していれば結界門から下山しなければならない。

わたしなんぞは、そんな無礼なオキテはムシして、ヤミに紛れて行ってしまえばいいと思うが。最初に行く人は勇気がいる。私が女だったら、誰かが行った後なら行ってみようかと日和るだろう。

ここは吉野熊野国立公園であり、山上ヶ岳の本堂の再建には国費が使われ、大勢の女性からの寄付を仰いでいる。寄贈者の銅板の名前を女性たちは見ることができないなんて、本当に女性をバカにした話だ。

前置きが長かったが、六田からスタート

■朝６時、東京からの夜行バスで京都駅に到着。前日京都泊の下島伸介さんと合流し、近鉄線で吉野へ向かう。終点手前の六田（むだ）で下車。和歌山方面からくる一行と合流する。吉野山の下千本、中千本、上千本の桜の名所を登るのだが、電車の終点からでは、奥駈けにはならない。昔の奥駈け路は、六田の河原で水垢離をして紀ノ川を渡り、登り始める。正式にやるには紀ノ川の水量が多すぎるので橋を渡って細い山道をのぼりはじめる。

草刈りをしているおじさんが、「この道は通れないよ」というが、先達（せんだつ）

のKさんは通いなれた道だ。試行錯誤でこの道が奥駈け道であることを確信したという。

連休というのに全く人のいない吉野神宮を通過し、吉野葛や陀羅尼助（だらにすけ）の店を眺めながら、蔵王堂に向かう。

ここが大峰山修験の中心で蔵王権現をまつるお堂である。スキーで有名な蔵王山の総本山はここである。このあたりが中千本だが桜はとうに終わっている。

蔵王堂をながめる丘に韋駄天をまつる社がある。アメリカ大陸5000㎞を走って横断した下島韋駄天と一緒に写真に収まる。上の千本にも桜はない。奥の千本にチラホラと山桜が咲いている程度だ。

■西行の庵

奥の千本西行庵がある。西行が行ったところなら千里の道も遠からず。芭蕉は常にその後を追っている。

◆西行の歌（山家集）

「吉野山　こずえの花を　みし日より　心は身にも　添はずなりにき」

「吉野山　谷へたなびく　白雲は　峯の桜の　散るにやあるらむ」

「願はくば　花の下にて　春死なむ　その如月の　望月のころ」

◆芭蕉の歌　1684年「野ざらし紀行」 1688年「笈の小文」

「吉野にて　サクラ見せうぞ　檜の木笠」

「雲雀より　空にやすらう　峠かな」

「さまざまの　こ と思い出す　さくらかな」

■修験の道へ

高城山から、尾根筋にのびる吉野の町ながめ、いよいよ本格的な修験の山に入る。1200㎞の守屋岳を越えるころから雲いきが怪しくなり、下界は晴れ間が見えるのに、空は暗くなってくる。熊野奥駈けの気分が高揚してくる。

足摺小屋、二蔵小屋など設備のいい避難小屋が適度の間隔であらわれてくる。こんな小屋に泊まりたいが、今日の目的地は五番関。まだ先は長い。

大天井岳は巻き道を使い、豊富な水場をへてやっと五番関につく。もうほとんど日は落ちていた。

ここに問題の「女人結界門」がある。ここには英文で次のように書いてある。

No Woman Admitted
Regulation of this holly mountain
Ominesan prohibits any woman from climbing farther through this gate according to the religious tradition
Ominesanji Temple

すなわち、宗教上伝統で女人禁制になっているということだ。

Kさんは毎年ここで洞川に下っているが、今年は気合いをいれて下山せず、直接山上ヶ岳に向かうことにする。

三輪、下島の通称「走る浮浪者」組はテントを持ってないので、吹きさらしの峠から下がった東屋の屋根の下に移動。囲いがないので、吹きさらしと変わりなし。シュラフカバーにくるまったが、雨と風と寒さで熟睡とはいかなかった。

◆柳の渡し(11:00)－吉野山(12:00)－高城山(1:30)－アシズリ小屋(3:40)－二蔵小屋(4:30)－水場(5:10)－五番関女人結界門(6:00)テント（水なし）

山上ヶ岳　山伏の修験道場

■いよいよ山上ヶ岳

五時に五番関に登り返すと、みなさん出発の準備をして待っている。そのまま出発。洞辻茶屋で洞川から登ってくる登山道にであう。このあたりには誇らしげに大峰山登山三三回とか、四四回とか書いた石碑が林立している。そんなもん何が偉いかという気になる。登りたい人もいるのに登ってはいけないという規則をつくっておいて、自分は何十回も登ったと言って威張り、記念碑まで作るという神経はどう考えても真っ当なものとは言えない気がする。わたしも山登りをしたりすると、すぐに威張りたくなる方だが、自戒しなけりゃいけない。

洞辻茶屋は陀羅尼助の店が両側に並んでいる。五月三日が山開きだから、いまはまだ誰もいない。山開き以降はこの両側の店で女人がいないかどうか監視するという役割もあるのだという。

■重要文化財

五番関の結界門から二時間ほどで山上ヶ岳（1719m）にでる。重要文化財の本堂があり、周りには大きな宿坊がたっている。こんな深い山の中によくこんな大きな建物を造ったものだ。再建するときに多くの浄財を集めた。

寄付した人たちの名前が銅板に記して掲げてある。全国からの寄付があるがほぼ半分が女性の名前である。もちろん彼女たちはこの名前を見ることはできない。

広い山上はお花畑になっているというが、いまはまだ雪が残り、花の色はまったくない。霧がでてきて見晴らしはきかない。気温は４℃。

複雑な思いで山上ヶ岳をあとにし、地蔵岳を越え、小笹宿につく。きれいな水の流れる開けた場所で、避難小屋もある。このような場所は靡（なびき）とよばれる行場で、それぞれ番号が付けられており、第１は熊野本宮の証誠殿で、76 番は柳の渡しである。山上ヶ岳から一時間ほどで東の結界門にでる。ここからは女性も大手を振って歩くことができる。今の時期ここにもだれも見張りはいない。

■霧が晴れた

朝からここまでは霧の中だった。われわれに味方してくれる神さまが、あまり大ぴらにならないようにカモフラージュしていてくれたと解釈する。

結界門を出たとたんに、「もういいよ」というかのように空は晴れ渡ってきた。小普賢岳付近のはまだ雪渓が残っている。10時には大普賢岳(1778m)につく。景色はすばらしい。稲村ヶ岳、山上ヶ岳もよく見える。

東の女人結界門･･･英文が書いてある

ここからいくつかの峰を上り下りしながら行者還岳の小屋につく。ここはいま立派なログハウスを建築中である。行者還岳の直下はものすごい絶壁で、ロッククライミングの練習場によさそうである。この壁が「行者還」の名のおこりだろう。

■弥山へ

今日の目的地である弥山が見えるが、はるかに遠そうだ。行者還トンネル入り口から登ってくる登山道と出あう。Kさんは感慨深げに「これまでは、ここから登り返していたんだよなあ」とつぶやく。しばらく南に進んで、ほぼ直角にまがって西にすすむ。このあたりは吉野の山々とは違って、ブナの林もひろがり、いまは新緑の芽吹きがはじまる明るい森だ。杉の林は森全体が暗くて、なんとなく陰鬱だ。

弁天の森から弥山(1819m)は圧倒的にそそり立っている。疲れた足では登っても登っても頂上にでない。最後の階段も長い。おりてきた人の、「鉄のはしごを昇ったらすぐですよ」という言葉をめあてに足をあげる。シラビソの林のなかに大きな建物が見えた。今日はテントではなく屋根のある宿舎に寝ることができる。着いた時間が遅かったので食事は出ない。東京勢二人はカップラーメンと白飯を注文してたべる。後になって奈良県在住のOさんが重たい差し入れを担ぎ上げてくれた。感謝感激。外に出るとシカが寄ってくる。このあたりの新芽はすぐにシカに食べられる。かわいい存在ではなく、増えすぎて害をなす害獣なのだ。

寒い小屋だったが、寝具は温かく、3日ぶりにゆっくりと寝ることができた。

◆五番関(5:00)－洞辻茶屋(6:15)－雨－山上ケ岳(7:10)－小笹宿(8:00)－東女人結界門(8:30)－小普賢岳(9:30)－晴－大普賢岳(10:00)－行者還岳小屋(12:30)水場－弁天の森(3:10)－弥山小屋(4:35)泊（水宿舎のみ）

金剛界から胎蔵界へ　鬼もいるぞ！

■日本百名山‥‥大峰山はどこだ

連休のころは毎年、雨が降るというが、昨日に続き今日もいい天気だった。弥山からシラビソの林をくだり、すぐに八経ケ岳(1915m)に登り返す。

ここが近畿での最高峰であり、深田久弥の日本百名山の一つである。

‥‥‥ 大峰山はわが国でもっとも古い歴史を持った山である。この山についての古記録は枚挙にいとまがない。昔は山中から金を産するの金嶽と呼ばれた。それが金峰山となった。甲州の金峰山などはこの本山から蔵王権現を分祠して名付けられたものである。開山は役の小角で、661年22歳で大峰山で修行したというから、これを登山記録と見れば日本最古であろう。いまだに女人禁制である。ここが大峰山の中心であろう

――中略――

大普賢岳、行者還岳の間は縦走路中、最も険峻とされている。夕方遅く弥山の山小屋についた。翌日残雪を踏んで、八経ケ岳に登った。近畿の最高地点である。ここからさらに南へ縦走路は延々と続くが、私はその最高点を踏んだことに満足して山を下った。‥‥‥

この文を読むと深田さんは大峰山を女人禁制になっている山上ケ岳と考えているようにみえる。それなら女性は日本百名山に全部登ることができない。しかし日本百名山の本では、大峰山の標高が1915m となっている。これは山上ヶ岳（1719m）ではなく八経ヶ岳のことをである。 深田さんは女性に対して配慮し、八経ケ岳を大峰山としたのかもしれない。

■シカの害

八経ケ岳の登山口には、結界の門がつくられている。それは女人ではなくシカよけの柵である。オオヤマレンゲの自生地であるが、シカがその芽を食べてしまうので、一帯を柵で囲んでいるのだ。シカは食べ物がなくなると木の皮もはがして食べる。そのために立ち枯れしている木も少なくない。

舟のタワというおもしろい峠がでてきた。二重山稜になっているところで、舟底のような凹みを舟窪地形という。これがしばらく続く。楊子ケ小屋（10 人ほど泊まれる）をすぎるとコバイケイソウの群落がでてくる。枯れ葉ばかりの森に、緑の畑のように葉がニョキニョキでている。アルプスではよく見る植物だが、ここにこんなにたくさんあるとは思っていなかった。ドクがあるのでシカは食べない。植物博士の下島さんがいろいろ説明してくれる。今回の山行では教養が深い人が多いので、いろいろ教えてもらうことが多い。わたしの特技は走ることぐらいだが、アメリカ横断をした下島さんがいては自慢もできない。

シカを避けるためのゲート

五百羅漢の岩峰が見事な孔雀岳付近から一段とシラビソの立ち枯れが目立ちはじめる。シカの害だけではなく、酸性雨とかなにか他に原因がありそうだ。日本の場合、酸性雨は降り始めはかなりの酸性度を示すが、しばらくすると中性の雨になり、葉についた酸性雨を洗い流す。ヨーロッパの場合は酸性雨より酸性霧のほうが影響が大きいという。長時間じっくり霧に浸された状態になると被害が大きくなるのは理解できる。ここ釈迦ケ岳付近でも霧に包まれることが多い。その影響なのかも知れない。

■金剛界と胎蔵界……

孔雀岳と釈迦ケ岳のあいだの鞍部「両部分け」が金剛界と胎蔵界の境である。ここより南が胎蔵界、北が金剛界である。空海の真言密教では金剛界、胎蔵界曼陀羅がたいへん有名であるが、それはいったい何だ。

実はどの説明を読んでもよくわからない。やさしい本には胎蔵界は空、風、火、水、地の五大、すなわち色法（物質）のことで、金剛界は識、すなわち心法（心のはたらき）であると書かれている。

あるいは金剛界は「智」、胎蔵界は「理」という概念であるとも書いてある。本来は場所によって金剛界、胎蔵界と分けるものではないが、山伏修行の方便として、ここで区分けをしたのだろ。

釈迦ケ岳(1800m)への登りもかなり急坂である。最初に書いたとおり南北に続く大峰山脈の山々は東西の方向の谷が深く

刻み込んでいるので、ひとつひとつの山が切り離され、急峻になっている。ダラダラつづく尾根路というのはほとんどない。

釈迦ケ岳の頂上には巨大なブロンズの釈迦像が建っている。Kさんによれば、一人の強力が背負って運び上半身と下半身をつなぎ合わせたのだそうだ。

■前鬼と後鬼

転がるように下った所に深仙小屋があり、香精水があるのだが、ほんのチョロチョロしかでていない。しかたないのでたまり水をくむ。奥駈けではほとんど尾根筋をとおるので、水が不足する。夏の時期には水がないので。全山縦走はかなり難しくなる。

香精水をすぎるとすぐに大古の辻にでる。ここでほとんどの登山者は前鬼に下る。役の行者は鬼をも従者とするような超人だった。従者の一人前鬼はこの深仙の行場を守っていた。前鬼の山伏はその子孫だ。もう一人の後鬼は山上ケ岳の道場を守っていた鬼で、その子孫は洞川の山伏といわれている。

大古の辻のそばには大日岳がある。釈迦ケ岳よりだいぶ低い。真言密教では大日如来の方が釈迦如来よりえらい。それなのに名付けられた山の高さがこんなに違っていいものか。

大古の辻

■修行が足りない

大古の辻をすぎるといよいよ山は深くなってくる。登山者に会うこともないと思っていたら、シャクナゲ岳の間から二人のアメリカ人がでてきた。わたしが着ていたアメリカ横断のTシャツを見て、驚いていたが、私たちも山伏修行の路で外国人、それも一人は女性を見て驚いた。

どの山頂も越えていくように道が付けられている。しかし疲れ果てた私たちは滝川辻から巻く路をみつけ、下島さんとすすみ始める。あとからきた先達は、「楽をしようとする心があるのは修行が足りない」と、われわれをムシして山頂に向かった。巻道はどんどん下っている。植林用の道だ。先達たちは剣光門で待っていてくれた。たしかに修行が足りない。

これでもか、これでもかというほど小さな登りがでてくる。すべて山頂を踏みやっと涅槃岳につく。大峰山の登山地図の表面がここで終わる。地図の裏面の証誠無漏岳を経てやっと持経の宿につく。

■煙い小屋でも黄金の御殿

小屋からは煙が出ていた。この小屋は奥駈けを復活させた篤志家の建てたもので、一般の人々の避難小屋として使わせてくれる。

小屋には、数日前から断食行をしている青年が一人、いろりで薪を燃やしていた。そばで食事をするのは気の毒なのだが、こっちはエネルギーを補給しなければ明日の山旅がおぼつかない。

水は林道を５分ほど下った所にある。久々に顔を洗った。山桜がいま満開だった。昨日の営業山小屋と違って、ほっとする暖かい宿だった。縦走路にこんな小屋があることはありがたい。

食事を終えた頃、二人の登山者が小屋

に入ってきた。途中で追い越した人たちだった。暗い中、魑魅魍魎にであわずによく歩いてきたものだ。

◆　弥山小屋(6:30)－八経ケ岳(7:45)－舟のタワ(8:25)－楊子小屋(9:00)－水場(9:35)－孔雀岳覗き(10:20)－両部分け(11:10)－釈迦ケ岳(11:45)－香精水(12:30)－天狗岳(1:38)－地蔵岳(2:40)－電話が通じた－剣光門(3:50)－涅槃岳(4:20)－阿須迦利岳(5:05)－持経小屋(5:35)泊（水あり）

笠捨山から玉置山へ

■昨日の外国人にまた会う

持経小屋は快適そのものだった。朝はいろりのお湯をいただいて、すぐに食事をつくる。６時に出発し、１時間で平治小屋につく。Kさんは前回、弥山からこの小屋まできて泊まったそうだ。なかなかいい小屋だ。モクレンの白い花が今盛りだ。もしかするとタムシバの花かも知れないが、わたしにはあまり区別できない。色があるのはミツバツツジ。これがまたすばらしい色をかもしだしている。目の下には国道425号線が登ってきている。なんとなく奥深い山から、人里が近くなってきた感じだ。

トンネルの上をこえると行仙岳の急坂にかかる。頂上にはNTTやNHKの電波塔が立っているので遠くからよくみえる。今日も前途は長いのに、この坂でもう疲れ果てる。下りにかかると金槌の音が聞こえてくる。佐田の辻にある行仙宿小屋の工事中の音だった。大峰山中は世界遺産に登録されることになったので、すべての山小屋が新しく建て替えられている。これはなかなかいいことだ。

笠捨山へののぼりにかかった頃、上からおりてくる二人組にあった。なんと昨日シャクナゲ岳であった外国人二人連れだ。ほとんど人に会わないような所で、同じ人に２回もそれも外国人なんて、ちょっと驚いた。

■地蔵岳は最大の難所

笠捨山を過ぎ、送電線の下をくぐった頃から山が険しくなった。地蔵岳の上り下りはまさに岩登り、クサリが付いているが、高所恐怖症には恐ろしい道だ。

先達は知っているのだが、みんなが恐れたら困るので知らせなかったとのこと。さすが配慮がある。

四阿宿には国道におりる道がある。そこからほぼ直線状に玉置山に進むのだが、杉林の急坂はなかなかきつい。

■太平記の世界

杉林の下に２１世紀の森という施設が見える。連休中であるが人は誰も見えない。こんな所に都会風の施設をつくっても意味はない。杉林をたんたんと歩く。徐々に天気は悪くなってくる。今日の泊まりどころが心配だ。

予想よりはるかに遅れて花折塚につく。このあたりは林道が入り込んでおり、里にも近い感じだ。花折塚というのは、後醍醐天皇が大塔の宮から落ち延びてきた時の９人の従者の一人である片岡八郎の墓所である。玉置神社は後醍醐を受け入れを拒み、道を塞いだ。片岡は後醍醐の身代わりになって戦死した。このあたりは「太平記」なかのクライマックスらしい。後になって彼を弔って塚がつくられた。

このあたりから雨になり、ゴアテック

スの雨着を着るがあつい。道ばたのやぶれ笠、もみじ笠、まむし草など教えてもらう。夜のおかずを摘んでおく。

所々で、玉置神社への車道と交差する。頂上へ続く餓坂（かつえさか）にかかる。こんな字はなんと読むか知らなかった。今回の山登りは、教養がないと、理解ができないことが多くて大変だった。Kさんの理解は深く、何でも答えてくれる。大先達だ。

■玉置神社

餓坂を登りはじめるともう玉置山に近いはずなのだが、山のピークより前に、疲れの方が先にピークに達しており、歩みは遅い。さらに雨はひどくなってきた。

頂上の電波塔の先に鐘があった。うち鳴らしてみたいが槌がなかった。頂上付近は一面のシャクナゲの林でなので、木の下にもぐり込めば雨は防げるかも知れない。

しかし雨もひどくなってきたので、一気に玉置神社に下る。思っていたよりはるかに立派な神社だった。神官がいると泊まれないかも知れないという予想の通り、何人も残っており、軒下にテントを張ることも許可してくれない。宿坊があるので、泊めてくださいと頼んだが、会員でない人はダメだとのこと。会員になりますといってもダメだった。

玉置神社

■権威になるとだめだなあ！

雨が降ってとても寒かったこともあるが、人が困っているときに神社というのはどう対応するのか、それを見定めたくて、粘ってみた。

例えば、広い回廊の下で休憩してもいいですよ、というような方便はできないものなのだろうか。高野山の時には、大門の下で一夜あかしたが、別に何の問題もなかった。奥駈け路にある最大の神社なのに、奥駈けに対しての理解が欠けているように思われた。

先達は断られたら３０分ほど降りた本宮辻でテントを張るつもりだった。

浮浪者組は、ある建物の軒下の空間に目をつけていた。雨が吹き込まないようベニヤ板を立てかけたので、風雨をよける寝床としては最高。

のんびりと縁の下生活を楽しむ。人が見たら正真正銘のホームレスだ。

■耳なし芳一になりそう

ぐっすり眠った真夜中丑三つ時、ベンベンベンという琵琶の音色に目が覚める。杉木立に風が吹き付ける音の合間に、確かに琵琶の音が聞こえるのだ。音は近づいたり遠ざかったりする。たぶん石段を上がったり下がったりしながら、琵琶を弾いているのだ。この雨の真夜中に誰が弾いているんだろう。

ここは平家物語の世界ではないが、後醍醐天皇の戦いの地だ。さっきも花折塚の前を通ってきたばかりだ。琵琶法師が私たちに語りかけようとしているのかもしれない。耳なし芳一を世界だ。恐ろしくて、耳を覆うがいっこうに琵琶の音はやまない。下島さんに声をかけるが、ぐっす

り眠っている。ここは魑魅魍魎のすむ熊野の国だ。なにが起こっても不思議ではない。しかし昼間の疲れで琵琶の音を子守歌にして熟睡してしまった。

明るくなる前に、見つからないように急いで朝食をとって、ねぐらを引き払う。

「下島さん、昨日琵琶の音、聞かなかった？」

「あれでしょ」

目の前の旗をたてるポールにひもが風で打ち付けられ、琵琶の音が奏でられていた。魑魅魍魎など今はいないのだ。

◆ 持経小屋(6:00)－平治小屋(7:00)－倶利伽岳(7:44)－行仙岳(9:00)－行仙小屋(9:50)－笠捨山(11:00)－送電線(11:40)－地蔵岳（岩登り危険)(12:20)－四阿宿(13:20)－香精山(1:40)－塔の谷峠(2:10)－如意宝珠岳(3:10)－花折塚(4:30)－玉置山(5:30)－玉置神社(5:45)－泊

玉置神社から熊野本宮へ

■まだまだ山は深い

５時に本宮辻にテントをはった先達に合流。大森山、五大尊を通って、大黒天神岳を登る。1000mを切っているのにまだまだ深山の様相である。下島さんによれば、ウバメカシの落ち葉は腐りにくいそうで、雨に濡れると滑りやすくなる。急傾斜の下りではみんながズルズル滑っている。それぞれが今山行中最大の転倒をくり返している。後で考えるとよくケガしなかったものだと思う。みんな疲れでバランスが悪くなっており、リカバリーの力もなくなっているので簡単に転倒してしまうのだ。

■最後は川を渡らなきゃ

予定ではお昼には熊野本宮に着きそうだったが、どんどん遅れて、というより先達が「そんなに急いでいってもおもしろくないよ」という言葉にあわせて、のんびり歩いた。七越峰をこえるとまもなく眼下に熊野の町が見えてくる。最後は備崎から旧熊野本宮地へ、川を渡っていくのが正式の奥駈けである。わたしが渡りはじめたが、膝まで水量があるのでやめたら、下島さんが「大丈夫だよこれぐらい」と渡りきってしまう。残りの人たちは自重して、備崎橋を迂回する。１時すぎに目的地の旧社地につく。巨大な鳥居の下から、いま通ってきた熊野奥駈け道を仰ぎ見て、感激する。

■記念すべき奥駈けだった

わたしも初めて奥駈けを達成した人たちと一緒できたことに感動した。いずれかの時期に女性も大手を振って奥駈けができるようになるだろうが、そのときに「実は・・・・」と言うことを楽しみにして取っておこう。

渡瀬温泉に行って、目張り寿司をたべ、温泉に浸かって五日間の汗とアカを流し、新しい下着に着替え、新宮行きのバスにのる。下島さんはさらに中辺路を歩くために残った。

◆玉置神社(4:45)－本宮辻(5:10)－大森山(6:50)－五大尊(7:50)－大黒天神(9:30)－吹越峠(10:00)－七越峰(12:00)－備崎河原(12:30)－熊野本宮旧社地(1:15)ゴール

－熊野奥駈け 報告書－

最初のページにあるように、この報告書は、熊野山中での修行の結果えられた体験をもとにして書かれた者です。

これを読むと霊験あらたかな気分になり、さらに神社で授かった「お札」と同様に、神棚に飾ると、さらに家内安全、国家安康になること請け合いです。

そのような報告書なので、入手は大変困難ですが、今回は特別にお分けすることに致しました。先着順ですので、どうぞお早めに！

執筆・編集・地図作製・印刷・製本　三輪主彦
2003 年 5 月　資金提供　三輪倫子